

創設から13年目を迎えて

本研究センターも2000年の設立から、13年が経とうとしています。その間、社会人対象の公開講座の充実、南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻の設立と院生の教育研究の支援、さらには、国際医療センターの受託研究「人間中心に向けての教育プログラムに関する研究」、文部科学省大学・大学院における教員養成推進プログラムや専門職大学院教育推進プログラムの採択を受けたプロジェクトの実施などを行ってきています。その活動の中核には、ラボラトリー方式の体験学習の実践研究があります。ラボラトリー方式の体験学習の実践研究は、本学の教育モットーである「人間の尊厳のために」をベースに行なわれています。「人間の尊厳」とは、誰もがかけがえのない価値や権利をもっていること、それを理解し、尊重し合うことです。そうした個性を認め合う、また人間性豊かな社会を創り出すためにラボラトリー方式の体験学習は貢献しようと考えています。

今回の紀要の特集のテーマは、「共生」にしました。まさに、異なる人々がいかに相互に理解を深め、ともに生きる社会を創り出すことができるのかといった問いを立ててみました。共生といっても、関係する者相互に利益を与え受けることができる相利共生の相互関係が生まれることを願っています。今回の紀要に掲載された記事により、こうした共生のありようや共生に向けての実践的研究アプローチに少しでも光があたることを願っています。

2012年度、センター研究員に新しいメンバーが加わりました。南山短期大学から短期大学部への移籍にともない、英語学・言語学を専門とし社会言語学的アプローチから臨床場面での分析を行っている丹羽牧代さん、アートセラピーを専門として自己発見・自己表現のための創造的な活動を行っている伊東留美さん、社会心理学、対人・異文化コミュニケーションを専門として対人葛藤とサポート場面に関する研究を進められている森泉哲さんの3名です。こうした新しいメンバーの加入にともない、センターの活動の活性化が進むことを願っています。

活性化の一つの表れとして、2012年度は定例研究会を4回開催することができました。こうした活動も、今後のセンター紀要に掲載されたり、また前号の紀要で紹介された論文の展開として研究会が開催されたりしています。

今年度は、第1回定例研究会「ソーシャルサポート要請の日米比較—文化の複層性の観点から—」森泉哲研究員（南山大学短期大学部英語科准教授）、第2回定例研究会「社会言語学における『人間関係の中の言語使用』へのまなざし～Welfare Linguistics Rising～」丹羽牧代研究員（南山大学短期大学部英語科教授）、第3回定例研究会「ドイツの市民参加による熟議の手法『Planungszelle』が参加経験者・未経験者に及ぼす効果」前田洋枝氏（南山大学総合政策学部総合政策学科講師）、第4回定例研究会「東日本大震災と災害ボランティア：初動の問題と被災地のリレー」渥美公秀氏（大阪大学大学院人間科学研究科教授）でした。

今後の本研究センターの活動が公開講座や定例研究会、ならび紀要などを通して、ラボラトリー方式の実践研究活動がさらに発展していくことを願っています。

南山大学人間関係研究センター長 **津村俊充**

